

捕獲大作戦 2

Y u r i k o & K e i g o

丹羽庭子

Niwako Niwa

eternity



エタニティ文庫

目次

捕獲大作戦 2

5

インタビュー
Side
袴田圭吾

307

書き下ろし番外編
抑制と促進

325

捕獲大作戦
2

1

「重いだろ。その荷物よこせ」

きゅん……

「はぐれるぞ。ほら——お前の手、温かいな」

キュン……

「外食もたまにはいいが、ユリの料理が一番好きだ」

はうっ……し、心臓がつっ！ ああ、もう、どうしたらっ！

結婚して早三ヶ月——私、滝浪ユリ子は、愛しの旦那様・圭吾さんに身悶えする日々を送っております。

今日は、二人でお買い物。

最初に訪れたデパートでは、圭吾さんのご命令により何度も試着をさせられ、やっと冬物を数点買い終えました。

可愛らしいボタンの真っ白な本革のコートは、圭吾さんのイチオシです。襟元と袖に

フワフワとしたファーが付いていて、暖かくて触り心地抜群。

圭吾さんは私を着せ替えるのが好きなんだそうです。リアル着せ替えごっこ……？と、ちよっと引きかねない趣味かもしれませんが、どんな趣味でもイケメンだからOK！のマジックが発動されて、私が受け入れちゃっているのですから問題ナシです。イケメンで——ずるい！

その後、私達はランチを楽しみ、腹ごなしをかねて繁華街の目抜き通りをブラブラ。すると圭吾さんが「ちよっといいか？」と、携帯ショップへ立ち寄りました。修理に出していた会社用のタブレット端末を受け取るみたいです。そしてなぜか、私と圭吾さんの携帯電話を、スマートフォンに機種変更……

え……？

「圭吾さんと、お、お揃い……！」

「駄目か？」

「逆ですぜ、旦那あ！ むしろありがてえですよ！」

「……どこの町人だ」

ふおお……これなら電子書籍になった（BL）小説とか、（BL）漫画が手軽に読めるう！ ひゃっほう！

……って、すみません。つい、取り乱してしまいました。

だって私は腐女子……つまり、アニメや小説やゲーム（主にBL）が大好きなオタク女子ってことで——

こんな私を、圭吾さんは、その、丸ごと愛してくださいなさっているのです。……なんて、自分で言うのも照れませんが……

大興奮している私の頭を撫でた圭吾さんは、私とまた手を繋ぎ、今度は家電量販店へ。それぞれ見たいものがあるので、二手に分かれて散策です。実は私、新作のゲームをチェックしたかったのです。私も働いていますので、なかなかゲームをする時間が取れない。それに家事も忙しい……なんといつても新婚ですし！ だからどうせなら厳選した一作をプレイしたい訳ですよ。

でも散々悩んだ結果、ゲームはやめて、今回は調理器具を買うことに。選んだものは、スティックタイプのブレンダー。簡単に物を刻んだり泡立てたりできるから、料理の幅が広がりますよ、奥様！

駄目とは言われないだろうけど、一応買っていいか、圭吾さんに聞いてみようっと。売り場をあちこち探したら、圭吾さんはなぜか洗濯機売場に。……まだうちのは壊れていないんだけどな。うーん、やっぱり新機能とか付いてると、つい見ちゃう心理ですかね？

「圭吾さん。これ買ってもいいですか？」

「ああ。——なんだ、わざわざ聞いたりして」

圭吾さんは呆れたように私の手からブレンダーを取り上げて、さっさとレジカウナーへ持っていく。

「ユリは無駄遣いするタイプじゃないってわかってる。必要な物なら自由に買っているんだぞ」

「あ、でも、家族の物ですし、いいお値段ですから一応、と思ひまして」

家族……と圭吾さんは私の言葉を繰り返した後、黙って私の頭を撫でてくれる。おやおや、圭吾さん、若干頬が緩んでおりますよ？

家族で使う物なので、ちゃんと相談して買いたいです。

独身の頃、お金を使うのは、大体地方のオフ会とか、同人誌の即売会ぐらいだったの
で、誰に相談する必要もなかったのですが、なんととっても夫婦ですからね。

また最近、オシャレの楽しさを知りました。身だしなみっていうやつに気を遣うようになり、周囲の評判も上々。圭吾さんもお褒めの言葉をくださいます。

『今日も可愛いな、ユリ。それを脱がせるのも楽しみだ』

こんな感じのときでもないセリフを浴びせられる毎日は、なかなか刺激的でゴザイマス。

会計を済ませ、それぞれ片手に荷物を持って手を繋ぎ、二人の愛の巢へと帰る。

あー……なんかすごくすごく、幸せ。まさに幸せって、こういうコトを言うんですねえ。

ぴゅうつと吹く風の冷たさが、冬の訪れを知らせる。これからどんどん冷えこんでくるんだろなあ。でも、私と圭吾さんは新婚アツアツなので寒さなんかには負けません！ 幸せを噛みしめながら、私は結婚に至るまでのドタバタの日々を思い出した。

『今時どこで売ってるのか探すのも大変な、ガラス製の太枠黒縁眼鏡。梳いた形跡の見当たらない重たい髪を真ん中分けにし、かつ二つ縛りにした昭和な髪型。そして化粧つけゼロの顔。彩りが一つもなく、可哀想にすら思えるその残念な服装。どれもこれも最初から気に食わなかったんだ。変えろ』

それは、入社してしばらく過ぎた頃——私が描いたBL漫画を、カチョーである圭吾さんにウツカリ見られてしまったことから始まったのです。

男×男のラブストーリー『課長、深夜に愛を』は、袴田圭吾×清水博之しみずひろゆきという実在する私の上司をモデルにしたものでした。自分がモデルとなっているその漫画を見た圭吾さんは激怒する……かと思いきや、原稿を返してくれ、さらにこのことを自分の胸一つ

に収めるとおっしゃった。でも、それで済まされる訳がない。代わりに、彼は『三つの条件』を私に突き出した。

一つ、ダサイ見た目を変えること。

二つ、一ヶ月間、カチョーの家に住みこんで、家事全般をすること。

あれやこれやと抵抗しましたが言いくるめられて、最終的に条件を呑むことになりました。そしてカチョーのプライベートを知り、様々な出来事を乗り越えるうちに、いつの間にかカチョーのことを好きになっていたのです。

さらに幼い頃、実はカチョーがお隣に住んでいたという事実を思い出してね！ いや、もうびっくりですよ！ しかもそれを、私の家族が私に黙っていたことまで発覚しましてね！ 家族が教えてくれなかったのは、私が自分自身で記憶を封印していたからだだったのですけど。小さい頃からの縁って、なんだか運命的……！

そして三つ目がなんと——婚姻届にサインをすること。

まさかまさか、ですよ！ 色々すつとばして、いきなり結婚ですよ！ おいおい！

そんなこんなで——私、捕獲されてしまいました！ でも、す、好きだったから、願ったり叶ったりなんですけどねっ！

この夏は、まだ圭吾さんと私が奇妙な同居生活を送っていた頃に約束した、遊園地へ

行きました。しかも一泊二日です。まずは園内にあるプールへ。私は気合を入れて、レーズで縁取られたピンクの三角ビキニを身に着けました！ なのに圭吾さんてば、即座に「阿呆！ 着替えろ！」と命令。代わりに渡されたのは、売店にあった露出度低めなショーパンツのタンキニ……

しかも大きな浮き輪を、上からボサツと。

ちよ、子供ですか？ 子供扱いですか!?

非難の視線を送ると、「虫よけだ」なんて言つて仏頂面を見せました。まあ夏だし、蚊もいるかな。昼間はそんなに飛んでないけど、浮き輪にそんな効果があるなんて——つて、虫よけ!?

おっと、そうか！ そういうことか！ こ、これは独占欲つてやつですね？ やだ！ 圭吾さんつてば可愛い！ すごく可愛い！ そしてありがたや。圭吾さんと一緒だから、ちよつと背伸びした水着を着たかったのですが……周囲の目というものを忘れておりました。いやあ、ウツカリウツカリ。

圭吾さんは、私の隣でちよつぱり微笑んでいます。

ああ！ もう素敵すぎる！ ひとつ年を取つたせいか、端正なお顔に男の渋みが変わっている。そしてしつかりと筋肉がついたひろーい背中。こりゃあ飛びつきたくありませんね。水着の下の「男の武器」を見せられなくて非常に残念です。これはもう天下第一

品どころではない、素晴らしいブツですよ！ 何度、それになかされたことか！（あえての平仮名、どの漢字をあてるかは、ご想像にお任せします）

それから腕の筋張つたところも、手の甲がゴツゴツしているところも素敵！ なりに、濡れ髪が、濡れ髪が、濡れ髪が——っ！（もはや変態な心の声）

手を伸ばして、圭吾さんの腕をギュッと掴んで頬ずりすると、ポンポンと頭を撫でられた。

「可愛いな、ユリ」

くううっ！ 堪りませんっつ！

いろいろな感情が溢れ出てしまい、私は圭吾さんにコッソリ耳打ち。プールから引き揚げて予約しておいた近くのホテルに直行し、夕方まで部屋に籠っていたのは仕方なことだと思えます。

ほほほほら、し、新婚だし！

それから夕食を早めに取り、再び園内へ。

圭吾さんと指を絡めて手を繋ぎ、丘の上にある観覧車を目指して歩く。

婚約指輪代わりに貰った腕時計が、キラキラとLEDの光を反射してきらめいている。そろそろ花火が上がる時間だな、と思つて観覧車乗り場待っていたら、カップルや家

族連れが次々と後ろに並び出した。ほどなく順番が回ってきて、私と圭吾さんは観覧車に向かい合って座る。

——以前、圭吾さんとこの遊園地に来た日のことを思い出す。

あの時は、まだ圭吾さんの気持ちが変わらなくて。でも恋人になりたくて、なげなしの勇気を振り絞って、私は圭吾さんに言った。

『夏に、また二人で来たいです』

『一緒に、火花が見たい……です』

一ヶ月の同居生活が終わっても、二人の関係を繋ぎとめるために——

そして、とうとうあの時の願いが、今果たされようとしているのです。

ゆつくりと頂上を目指す観覧車からは、幻想的な遊園地のイルミネーションが見渡せる。前来た時は夕暮れ時のオレンジ色がとても綺麗だったけれど、夜のイルミネーションもまた美しく、胸に迫るものがある。

「なにを考えている？」

ウットリとしていたら、ふわり、と圭吾さんの手が膝に置いていた私の手に重ねられた。

「前に来た時の思い出をなぞっていました」

「前に来た時か……あの時、俺は内心すごく焦っていた」

「どうしてですか？」

「……絶対に逃がすものか、という強い想いを抑えるのに必死だった」
うおっ！ き、来ました！

「ユリの方から『また来たい、二人で』と言われて——もう一度、惚れた。その時ほど、己に科した制約を恨んだことはなかったな」
己に科した制約……って！ 確か時がくるまで手を出さないという、アレですかっ!? っていうか、とつくにキスはされておりましたけどね！ 濃厚な大人のキ・ス！

「もう一度、二人で一緒に来ることができて、よかった」

私は向かいの席から、黙って彼の隣にそっと移動し、指を絡めた。

伝わる？ 私の想い。

伝わる？ 苦しいほどのこの胸の高鳴り。

圭吾さんの瞳に映った私。ああ、私はこんな顔をしていたんですね。蕩けたように、欲しがるように、圭吾さんを見つめていたんだ……

ドンツ。

大きな音と共に、夜空で開く大輪の花。続けざまに、いくつもの花が咲き乱れる。

それを視界の端に映しながら、近づいてくる圭吾さんの唇を迎えるために、私はゆつくりと目を閉じた。

と、こんな風に結婚直後の三ヶ月は、瞬またたく間に過ぎていったのでした——

2

お買い物デートをした翌週末。圭吾さんが休日出勤してしまったので、私は真つ昼間から一人、家でパソコンに向かっておりました。私が所属する同人サークル『BARA ☆たいむ』のサイトを更新しているのです。

ハイ☆皆さん！ お元気ですか？ ばらメイカーりりい♪ですつ！

今日は大事なお知らせがあります。

『愁堂芙妃都』は、都合によりリーダーを退任しました。

引き継ぎなどがあるため、サークル活動の方は少しお休みをいただきます。

そんなこんなで、次期リーダーは皆さまご存知の『所天狐』に決まりました！

次のメルマガでは、同人誌即売会のスケジュールと、新刊のご案内ができればいいなと思います。

それでは皆様、よい夢を……

『BARA ☆たいむ』↓ <http://www.xxxx.ne.jp>

P.S. 私の個人サイトはこちらです。遊びにきてください☆↓ <http://www.○○○○.ne.jp>

タン、とエンターキーを押してアップロード。

もう結成八年目になる『BARA ☆たいむ』は、このたび活動休止の運びになってしまったのだ。永遠に続くかと思った、サークルメンバーとの腐った語り合いの日々が思い出される。

そもそも、どうしてこうなったかというと、サークルのリーダーが、二十九歳にしてとうとう結婚することになったからです！

私が圭吾さんと奇妙な同居生活をしていたつい数ヶ月前、リーダーには全く結婚の気配すらなく……それなのに先日——

『りりいたん！ 私、結婚するの。彼の国に行くことになったから、リーダーを降りたんだけど……』

なんていう報告がありましたね。

っていうか、『彼の国』ってどこ！ 相手は外国の人なのか！ なんて美味しいネ

タ！……じゃなくて、青天の霹靂せいてんってやつですよ！

という訳でリーダーは、みんなのスケジュール調整や、即売会の抽選予約、そして合同誌などの編集へんせんに搬入の手続き、そしてサイトの更新ができなくなってしまった。そこで退任という運びになったのだ。

新たなリーダーを立てなきゃいけないけど、自分に割り振られたページの漫画を描いていただけの私では、代わりなんて務まるはずがない。他に適任者はいないか、と考えるみたけれど……

インテリアコオーディネーターをしているメンバーは、仕事がすごく忙しそうで、たまに『修羅場なう』とSNSで安否あひがわかる程度なので、とても任せた！なんて言えない。もう一人は去年結婚して、最近子供が生まれたので、きつと子育てで大忙しだろう。ほかのメンバーに当たってみたけれど、『リーダーとなると荷が重くて……』と消極的だ。とまあ、紆余曲折うよまっせつありましたが、建前上の新リーダーを決め、皆で業務を分担する形でなんとか収まったのだ。サークルのホームページの管理は、私が担当になりました。一抹いちまつの不安はありますが、応援してくださいさる方もいらっしやいますので、いっちょ頑張りますよ！

サイトのBBSには、『寂しいです』『復活をお待ちしております』など、応援してくださいさっている方から次々にコメントが入った。ほとんどがリーダーのファンであり、そ

こからサークル全体を応援してくださいさるようになった方なので、リーダーがいなくなるというのはかなりの痛手いたでです。

次に私の個人サイトの方を見ると、チラホラとコメントが入っておりました。

三作続いた『課長、深夜に愛を』シリーズがなかなか好評で、固定の読者さまが続きました。……残念ながら圭吾さんとの約束で続編は出せませんがね。うん、非常に残念です……

コメント欄を見ると、いつもの方々から応援メッセージが入っていた。

【男おとこ免とこ子こ】——サークル活動が不定期になるということで、とても残念に思っています。それでも、ずっと応援していきます！もちろんりりいさんの新作も♪

【バンドスメル】——課長萌えの私としては、鬼畜攻めをする彼の姿を見たい！

【シルミルク】——私は清水押し！ 翻弄ほんろうされる彼が好き過ぎます。

あああ！ もう！ ありがてえですよ！ほんと、星の数ほどある創作サイトの底辺にいる私に、こんな優しいコメントをくださるなんて。もうなんととか恐れ至極きょうえつしごくでございまして、「あらっ、ようこそいらっしやいました！ ささっ、どうぞ座布団を。今お茶とお菓子お持ちしますからね〜」と、おもてなしをしたいくらいです。

一件ずつ心をこめて返信し、パソコンをシャットダウン。んーっ、と背伸びをしながら

ら時計を見たら、そろそろ家を出なければならぬ時間でした。実はこれから、リーダーと婚約者さんを交えてランチをするのです。待ち合わせのレストランに先に到着した私は、出入り口を気にしつつ、リーダーがどんな相手を手連れてくるのかワクワクして待っていた――

「それで、どうだったんだ？」

夜――

夕食を取ってお風呂に入り、いつものようにベッドの上で寝転がっていたら、圭吾さんに尋ねられました。

「それが……とんでもない相手を手連れてきたのですよ！」

圭吾さんの男らしい腕に巻きついていた私は、ガバツと身を起こして吠えた。

だって、だって！

――リーダーより二歳年下の婚約者は、『この二次元から引っ張ってきたのですかっ！』というくらい、端正な顔立ちのいい男でした。

もちろん私が言う『いい男』とは、ホモホモしい創作活動のモデルとしてふさわしい、の意味ですけれども。

リーダーの婚約者は、灰色の髪に水色の瞳という異国風の容貌ようぼうをしていた。細身のスー

ツを着せて、眼鏡をかけさせたら最強じゃありませんこと!?

私の方かに二人が座っていたのだけど、彼のリーダーを見る眼差しは、どこまでも優しく柔らかかった。うむ、誰が見ても、お似合いな二人です。リーダーは嫁ぎ先でも創作活動にいそしんでいるらしく、彼もリーダーのBL好きはご存知とのこと。

結婚しても趣味は続ける……師匠！

「りりいたん……なんか落ち着いちゃったわねー。前はもつとガツガツしてた気がするけど。あ、なんかわかっちゃった！ 三大欲求を満たされているから、かしら」

「三大欲求、ですか？」

「そうよ。食欲、睡眠欲、そして性欲よ。ずいぶんと可愛がられてるのねー」
そう言って、リーダーは自分の右耳のすぐ下を、指でトントンと叩いた。

ん？ 难道不是吗？ キョトンとする私に、リーダーは「付いてる」と教えてくれました。

――キスマークの存在を！

ええっ？ うわあああつ！ なんでなんでいつの間にかっ！

思わずパツと手で隠しましたが、体が茹で上がるかと思うほど熱くなり、恥ずかしすぎて消えてしまいたくなかった。

くっ、見てろよ圭吾さん。いつかきつと……仕返ししてやり……マス。

「……ってなことがありました……って！ 圭吾さん聞いてます!?」

「他の男の話なんぞ聞きたくないな」

「心、狭っ！」

ベッドの上で正座し、拳を握って語っていた私は、バツタリと倒れた。

嗚呼、圭吾さん、ふてくされておられる……！

私はリーダーの婚約者に対して「ああ、このビジュアルで、『ふふ……もう諦めたかい？ 私の手に墮ちるがいい』みたいなセリフを月光の下で言わせたい！」と妄想していただけなのですが……圭吾さん的には、私がニコニコして（実際にはニヤニヤ）、他の男性を褒め称えるのが面白くなかったようです。そこでハッと気づく。そういうのはちゃんと言ってくれなければ伝わらないのですよ。

私は仰向けに寝ている圭吾さんの腕と脇の間に潜りこみ、ギュウツと抱きついた。

「あのですね、前に言ったと思うのですが……三次元の男性として見てませんからね？ ネタですよ、ネタ。えーと、その、趣味の方の。私が好きなのは、圭吾さんです。圭吾さんだけが私の……私の……」

「私の？」

「リアル嫁です！」

「……は？」

「あああ、ごめんなさい。リアル嫁っていうのはつまり、既婚者が実際の配偶者に対して使う呼び名です。ちなみに大好きな二次元キャラのことは『俺の嫁』って言うんですよ。私にとっての『俺の嫁』は、圭吾さんなくては存在し得ないんです！」

「全くわからん」

「つまり圭吾さんあつての二次元萌えです。圭吾さんがいないと萌えられないんです、ダメなんです」

「ユリ？」

「じっとしててください」

圭吾さんの胸に耳を寄せると、とくん、とくん、と規則正しい心臓の音が聞こえる。あつたかいな。気持ちいいな。

しばらく耳を澄ましていると、圭吾さんが私の頭を優しく撫でてくれた。

こんな風に甘えられるのも、こんな風に応えてくれるのも、想いが通じ合っているからこそ。

顔を上げ、両手で圭吾さんの頬を包むと、少しだけ髭がジョリツとする。これが唇に当たると少し痛い。圭吾さんの唇に、自分から顔を寄せて口づけた。

ちゅ、ちゅ……と、軽く啄むように。圭吾さんは、されるがままで、私を興味深そう

に眺めていた。少しだけ舌を出して、彼の唇をチロツと舐める。それから、唇をこじあげ、綺麗に並んでいる歯列に舌を這わせた。

さらに奥へと舌を伸ばすと、圭吾さんの温かな舌先と触れ合う。誘うように、絡めてみたり吸ってみたりするたび、くちゅ、くちゅ、という音がした。

そして、口づけをしたまま、右手をそっと圭吾さんの下腹部へ向かって伸ばしていく。ガチムチマッチョではなく、必要な筋肉が必要なだけついた体を撫でて下りていくと、そこには固く屹立した男の欲棒が……！

「もう、おつきくなってます」

嬉しいですね。勃ち上がった肉茎が、私の手の中でどくどくと脈打っています。柔らかな手で包み、撫でるように上下に擦った。

「おい……」

「圭吾さん、お疲れでしょうから、せめて私が」

連日の残業に休日出勤にと、お疲れですよね。妻は心配なのです。

「熱い……です、すっごく」

初めての夜以降、何度も何度も何度も何度も何度も（エンドレス）、見たり触れたり挿れたりする機会があったけれど、どうも未だに慣れなくて……

手を添わせ上下に擦ると、より固く、より太くなっていく。それに伴い、キスもより

深くなって下腹の奥がキュンとする。

唇をちゅうっと吸った後、私は圭吾さんのズボンとパンツを一緒に下ろす。……おお

う……ご立派に成長あそばされて……

自分も、ズボンとショーツを脱いで、よいしょと圭吾さんに跨った。そして男茎を軽く握って自分の蜜口に当てる。うん、大丈夫。とくに自分の方は準備ができていたらしく、にちにちと粘ついた音がした。

「いきますよ……ふっ、……ん！」

相当な質量をもつものが、自分の腔内に入ってくるのがわかる。

受け入れる気持ちよさ、押し広げられる苦しさを、そして絶頂に向かう——期待。それらがいっぺんに襲ってきて、どうしようもなくなくなってしまふ。

私のナカが圭吾さんを啜え、奥へ奥へと導いていく。ぞくぞくとした快感が体中に広がり、ようやくすべてが収まる頃、私はくたりと圭吾さんの上に覆い被さっていた。

「……は……あつ」

う……動けない……です……

圭吾さんは私の背中を大きな手で撫でてくれる。しかし次の瞬間——

「やつ、ま、待つてくださいっ！ 動かないでっ」

「どうして?」

「ふあっ……う、動かれると……ダメなんです……」

「駄目とは？」

「とにかく……今は、待って……んんっ！」

ダメと言ったのに、なぜ動くのですかっ！

圭吾さんは、私のバジヤマの裾から大きな手を入れて、両胸をすっぽりと包み、揉みしだいた。優しく、時に強く、強弱をつけて。

「あ、あうっ……ん、やめ、て……っ」

胸の先端が下着に擦れてピンと尖り、敏感さが増していく。あ、も、もうダメッ！

「……あ、やああっ!!」

限界と思った瞬間、尖った先を両方キュツとつまみ上げられて、とうとう達してしまっただ。

目の前が真っ白になり、体がビクンビクンと痙攣を起こす。

「あっ、あ……ん、もう……だから、ダメって言ったんです……」

ふにゃつと力が抜ける。

「もうイッたのか。早いな」

「ミコスリ以下ですみませんねっ！ 圭吾さんが悪いんです！」

こんな体にしたのは誰よ、と思わず責任転嫁してしまう。だって、だってーっ！

ようやく力が入るようになった上体を起こし、圭吾さんの胸に手をつきながら言う。

「いや、でもでも今日は、圭吾さんに楽をしていたかどうかと思っただけですよ！ だからもう動かないでくださいね！……っしょっ」と

ゆるゆると腰を上下に動かした。うう、なんだか快感が、一度イッたせいとか、よりダイレクトに伝わってくる気がします。

「んっ、く……」

「こら、ユリ」

「今日は『私が』、なのです」

一度達したせいとか、恥ずかしいほどぐっちよぐちよに粘液が溢れている。そこから発する音がさらに私の羞恥心を煽った。あまりの恥ずかしさに顔を伏せたくなるけれど、最後までやりきりますよっ！

敏感な秘芯が圭吾さんに当たり、ビクッと腰が震える。

「ふあっ、……んんっ……」

圭吾さんの気持ちよくさせたい！ その一心で腰を動かすけれど、自分の快楽が勝つてしまう。自分の、よりよいところへ、知らず知らずのうちに腰の位置を調整する。

陰莖先端部の張りだした部分、つまりカリクビというものが私のナカを引っ掻くたびに、背筋にゾクリと快感が走る。こんな時にも、BL小説で学んだ名称が、思い浮か

でしまうから困ったものです。しかしそれを口に出さうものなら、凍てつく視線を向けられることはわかっているので、黙って集中いたします！

拙いながらも、頑張つて、頑張つて……。快感で崩れ落ちてしまいそうになるのを、なんとか耐えて必死で動いていたのに、圭吾さんは急に両手で私の腰をガツと掴んで、動きを封じた。

「ひゃうっ！ け、けいご……さんっ！ なんで止めるんですか！」

「阿呆が！ 息を荒らげられて、そのうえ潤んだ瞳で見られてみる！ お前は男というものをわかっているじゃない」

「わ、わかっただけじゃない！ あああでも男女関係における男の気持ちの揺らぎは、確かに理解できていないかもしれないま……せつ、んっ、んっ、んんんっ！」

圭吾さんは見事な腹筋を使ってガバツと体を起こし、私を下からガンガンと突き上げる。

「ああああっ！ やっ、あ、あ、ああああんっ！！」

上半身のパジャマを荒々しく脱がされ、私はあつという間に全裸になってしまった。上下にプルプルする自分の胸が、とてもイヤラシイです！

「待って！ 待って、くださいっ！ じゃないと、私——っ！」

「俺が待つとでも？」

必死にお願いする私に向かって、ニヤリと黒い笑みを浮かべる圭吾さん。怖いっ！怖いよ、その顔！ 笑い方一つで、この先どういうことになるかが予想できてしまいます！

こ、これはマズいです！ なにがマズいって……

圭吾さんは私の腰と後頭部を押さえ、逃れられないようにしてから顔を寄せる。そして、ざらっとした感触が口腔内に一気に入りこみ、暴れまわった。舌を絡めとられ、時折息を継げるように唇を離してくれるが、呼吸すらも奪う勢いだ。おまけに私のナカには圭吾さんが収まったまま。

「……うん！ けい、ご……さん、んあっ」

酸素を求めて喘いだけれど、圭吾さんの攻撃が緩むことはなかった。

腰にあつた手が、今度は前に回ってきたかと思うと、私の敏感な粒をきゅうとつまんだ。

「ふあっ、ああああっ！！」

再び痺れるような快感が突き抜けて、自分でも驚くほど早くイッてしまいました。全く制御できませんよ！

おのれ圭吾さんめーっ！

圭吾さんは、力が抜けてくたつとした私を抱きしめてくれた。

力が入らないのに、私のナカはビクンビクンと収縮を繰り返している。それがどうもケイゴサンをしめつけているらしく、頭の上の方からクスクスと笑い声が聞こえた。

「もつと、か？ ユリはおねだり上手だな」

「ち、違いますっ！ あああ、もう、なんでですか？ せっかく圭吾さんに負担をかけるような顔張っていたのに！ これじゃ、私ばかり気持ちが悪くて……申し訳ないです」

「俺もだ」

「へっ」

「俺も気持ちがいいし、ユリの善がる姿を見るのは、なかなかくるものがある。だから気にするな」

よが……よがるって！ 改めて言われると無性に恥ずかしい！

火照った頬を見られるのが嫌で圭吾さんにぎゅうつと抱きついたら、ふわつと背中シートが触れた。

「ふおっ!？」

「だが、もつと乱れさせたい。俺の手ずから、な」

「ちよ……!」

圭吾さんは私を仰向けに転がし、両脚を自分の肩にかけた。お尻が高く上がり、より

深く男茎がねじこまれる。

「や、だめ、だめだめっ!」

抜けそうになるほどギリギリまでゆっくりと腰を引き、ズン、と一気に奥まで貫く。

「きゃ……っん!」

強く、弱く、深く、浅く、変化をつけながら腰を大きくグラインドさせた抽送が繰り返されるうちに、ある一点で私の内壁が小さく震えた。圭吾さんはそこに狙いをつけて、小刻みに擦り上げてきた。

「ひう……んっ、んっ……ああっ、そこ、だ、め！ やっ、やああっ!」

圭吾さんを包む私のナカが痙攣し始める。私が快感のその先へと行こうとしていることに、圭吾さんは気づいたようで、ふつと微笑んで頬にキスを落とす。

「苛めるのはこの位にしておこう」

「いっ、苛めるって……うんっ……じ、自覚あるんですねっ!」

圭吾さんは私の反応を見ながら、あの手この手で攻めてくる。今回こそ私が襲って好き放題……にしたかったのに、結局自分が気持ちよくさせられてしまい、あつさりと白旗を上げた。

圭吾さんは肩から私の脚を下ろしてから、体を密着させた。そして何度か唇を合わせながら、舌を絡める。くちゅ、くちゅ、と互いの粘膜を擦り合わせた。

その最中も圭吾さん自身が私の中を貫く音と、溢れた分泌液の音が耳に飛びこんでくる。

「あ、あつ、あつ……だ、も……もうっ……！ 圭吾、さんっ！」

熱と呼吸と気持ち在上昇し、針の穴のような小さな出口へと向かう。声にならない叫び声を上げた次の瞬間、内部が痙攣した。それと同時に、激しく突き立てられていた肉茎が、最奥で爆ぜる。二度、三度、と繰り返し放出され、私の内壁はそれを吸いこむように、きゅうつと収縮を繰り返していた。

肌が触れあい、心が重なり、すべて満たされた気がします……

呼吸が整うまでの間、ずっと圭吾さんと密着している。これはもう、いつもの後戯ですね。同時にゴールした達成感というか連帯感が、全身に広がる。まあその、これぞ夫婦の共同作業ってやつですよ。

私の頬に軽くキスをして体を起こした圭吾さんは、「風呂行くぞ」と私をお姫様抱っこで持ち上げる。ええ、私ね、なんというかね、その、あの、力がね、入らなくて……これも、いつもの行為なのです。それに、ま、私が立ち上がると、トロツと零れてきちゃうから、自力で歩けたとしてもこうして運んでもらってたと思いますけどね。

「しつかり締めとけよ」

「アイアイサーー！」

「……そのかけ声はどうかと思うぞ」

ナカをキュツと意識して締めていけば、溢れないことを発見したのですよ！ わーお！合理的！

その後のお風呂場での出来事なんですけれど、まあ割愛ということで。なぜなら……第二ラウンドが始まっちゃったり……。お風呂場に大きな鏡があるんですけどね、それを正面にしながら「ここから出てくるのはなんだ？」なんつってさ、言わせようとしたり、見せようとしたり、アレなアレでアレが……（自主規制）

思い返すと乾いた笑いしか出てこないんですけどね。圭吾さんて……超……エロい……

そんなこんなで、イチャイチャラブラブな休日は過ぎていったのでした。

3

——おはようございます。今日も元気に腰が痛いです。

週明け、月曜日。私は少しの寂しさと期待を胸に会社へと向かっております。今日は

北海道から二名の社員が新人研修にやってくる。二人は今度立ち上げる札幌支社で働く予定の新人社員だ。札幌支社は現在、本社や各支社の上役の方々が向出し、経営基盤を整えているところ。そのため、札幌支社勤務の新人の研修は、私達が働いている本社や各支社が持ち回りで引き受けることになった。

営業部の男性が一名と、総務部の女性が一名。営業の方は二ヶ月、総務の方は一ヶ月、こちらに滞在する予定だ。

今回の新支社設立事業の中心メンバーになった圭吾さんは、一ヶ月こちらで二人の面倒を見て、その後、一ヶ月は札幌に滞在する。

一ヶ月間も別々に過ごすのか……

圭吾さんは研修の準備があるため、朝早くに出かけていきました。なので今日は一人で出社しています。

もともと圭吾さんは出張が多かったのですが、一ヶ月ものあいだ、離れるなんてことは初めてで、寂しくて仕方がありません。独身の頃、少しでも空いた時間があれば『ガッツリ漫画読んじゃうぜ！ ゲームでウハウハく！ ひゃっほい！』なんて喜んでましたけどね。

本当は妻としてとんと構え、「あなた、いつてらっしゃい」と余裕をもって送り出したいのですが……

でもでも、やっぱ寂しいから、メールも電話もいっぱいしちゃおっと！

「おはようございます！」

会社に到着した私は、元氣よく呼びかけました。就業開始には時間があるため、フロアにはまだほとんど人はいません。

さてさて、いつもの準備を始めましょかね。

まずは給湯室でコーヒーマシンにペーパーフィルターとコーヒーの粉をセットし、水を入れてスイッチオン。

その間にヤカンでお湯を沸かす。それからシンクを台拭きで拭いたりと掃除をしているうちに、コーヒーがタンク一杯になる。それを保温ポットに移して、もう一杯準備をする。ヤカンのお湯が沸いたらこれも保温ポットへ。そしてもう一回お湯を沸かします。

保温ポットは四つあって、二つはコーヒー、二つはお湯専用なのだ。これらを満タンにし終えたら、フロアに戻ってFAXを回収。宛先を確認してそれぞれの机に届け、それが終わったら自分のパソコンでメールチェックをする。ホワイトボードに伝達事項などを書きこみ、あとは作成しておいた仕事の資料をそれぞれのデスクに置いていく。

そうこうしている間に、続々と社員が出勤してきた。

「おはようございます！」

「おはよー」

営業部の人は、それぞれホワイトボードに予定を書きこんだり、メールチェックを始める。こんな朝の慌ただしい雰囲気、私は結構好きだったりするのです。

「ユリ子ちゃん、おはよ」

「おはようございます！」

私にファイルを手渡しながら挨拶をするのは、マメ橋センパイ。

「マメな高橋」からマメ橋という愛称で親しまれている。

「そうそう。後で袴田課長が朝礼で紹介すると思うけど、今日から二人、研修に来るから。営業の奴はまだ入社して間もないのに、前の研修先ですでに契約を取ってきてる有望株……ま、おれの大学の後輩んだけどさ。もう一人は可愛い女の子だよ。二人ともユリちゃんと同い年だからよろしくね。あとこれお土産。お茶の時に配ってくれない？おれ、今日は外回りなんだ」

マメ橋センパイは一見、三枚目キャラだと思われがちだけど……黙っていると実はカッコイイですよ！『課長、深夜に愛を』の脇キャラとして出演させるために、よくよく観察していて気づいたのです。

「うわあ、温泉まんじゅう！ 私、ここの好きなんです。旅行に行かれたんですか？」
「そうそう、一泊二日だね。部屋に掛け流し風呂がついてたんだ」

「……彼女としつぱり……デスネ……」

思わずゴクリと喉が鳴る。

彼女というのは、マメ橋センパイと同期の渡辺おねーさまという人。ええ、私が憧れるステキ女子です。

「袴田課長こそ、ユリ子ちゃんとどっか出かけたと思うけど？ ま、今は忙しいけど年が明けたら落ち着くと思うし、それまでの辛抱だね。おれも課長と入れ代わりで札幌へ出張に行くし、今回の旅行はしばらく会えない分の埋め合わせってやつだよ」

袴田課長——圭吾さんは、結婚を機にウチに養子に入り、『滝浪』姓に変わったけれど、仕事では『袴田』を名乗っています。私、袴田って苗字が好きなので、袴田カチョーってまだ呼べるのが嬉しいです。

マメ橋センパイは、「じゃーよろしく」とお土産の箱を手渡し、キュキュキュとホワイトボードに予定を書きつけて、さっさと会社を出ていってしまった。

私は受け取った温泉まんじゅうを給湯室の戸棚にしまいにいく。上司や同僚がおやつを買ってきたら、ここへ一つにまとめておいて、お茶の時間に配るのだ。

下っ端の私は、ここの給湯室の管理人となっている。来客時にお茶出しするのも、お菓子の在庫管理も私の役目だ。

その時フロアの方から、圭吾さんの声が聞こえた。給湯室からひよいと顔を出すと、

圭吾さんが手に持ったファイルを自分の机に置いたところだった。

うふふふ……今日も最高にカッチョイイですねー。

仕事中の姿を見られるのは、同じ職場ならではの特権だと思います。

ス・ウ・ツ！ ス・ウ・ツ！

圭吾さんのスーツ姿から目が離せません！ 自宅でも毎日毎日見ているのですけどね！ 職場で見るスーツは、また一味違うのですよおっ！ あんなにもスーツが似合うメンズがいるでしょうか！ これだけで、ご飯三杯いけますね。

実はネクタイは毎日私が選んでいるんです。できれば私に縮めて欲しいんですけど、ネクタイって結んだことないんですよねー。私ってば、そのようなッふあっしょん業界にはとんとご縁がなかったものですからねえ……。圭吾さんは手とり足とり、たまにプレイ(?)で私に教えてくれますが、なかなか難しいものですよ。

——そういえばスーツにハアハアしすぎて、ついお願いしたことがあります。

『め、眼鏡は！ 眼鏡はかけぬのですかっ！』

『必要ない』

『より完璧なビジュアルとなるのです……ダメですか?』

『駄目。大体俺は目が悪くない』

『老眼になった時のための予行練習としてひとつ』

『なにがひとつだ。阿呆が!』

ま、アツサリ拒否されたワケですが。

——圭吾さんのスーツ姿を堪能していたら、おっと、もうこんな時間！ 私には雑務の他に圭吾さんの補佐のお仕事もありますのですよっ！

「カチョー！ おはようございます。本日の午後、来客があります。いらっしゃるの………確か源(げん)じい………じゃなくて杉村(すぎむら)さんです」

「源(げん)じい、とはなんだ」

「あわわ、取引先の社長の杉村源(げん)三(ぞう)さんのことですよっ！ えーと、その、『源(げん)じいと呼んでくれなさいやだ』とおっしゃるので………つい………」

源(げん)じいのところには圭吾さんと一緒に訪ねると、いつも私にお菓子やらなにやら持たせてくれるのですよ。遠くに住むお孫さん(※八歳)に私がそっくりで、つい可愛がりたくなるんだ、とおっしゃっていました。私………二十三歳ですよ。

「あちらがどうしても、というなら仕方がない。が、くれぐれも他所(よそ)で口(くち)を滑(すべ)らせないよう気をつけろ」

「わかりました、カチョー」

公私を区別するため、会社ではちゃんとカチヨーと呼ぶのです。社会人ですからね、この位ビシッと決めますよっ！

「他にになにか連絡は？」

「時にカチヨー。先日商品を納品した店舗で、十周年記念のパーティーが行われるらしく、招待状が届いていますけど……いかがなさいますか」

「そうか、では、出席で返事を出しておいてくれ」

「はい」

「滝浪さんにも同行してもらおうから、そのつもりで」

「ふあっ……あ、はいっ！」

パーティーって苦手なんですよ。ドレスコードなんてのがあったり、芸能人とか、キラキラしたおセレブな方達が笑顔で談笑……。私、場違いじゃね？ と思いつつも、何度か出席したことがあるのです。まあ私は圭吾さんの後ろでニコニコしながら、名刺の管理をするくらいですけども。よくお会いするお客様とは多少はお話したりはしますが、お役に立てているかどうかなんて……それに出席している若い男性に食べ物やら飲み物やら勧められたり、ついでに外の風に当たらない？ なんて誘われたりするもの、ちよつと苦手です。そんなの適当に自分で食べるし、私にとつての清浄な空気は圭吾さんの周りにあるのです。本当にメンドクサイですが、お仕事だから頑張りますよ！

なのに、パーティーから家に帰ると、決まって圭吾さんにお仕置きされるんですよ……ええ、えっちい方のね。圭吾さんは不思議なお方です。

「全員出社したか？ 朝礼始めるぞ」

圭吾さんが声をかける。部長は普段から世界中を飛び回っているんで、圭吾さんが部長の仕事を任されているのだ。用事でいない人を除き、部署の全員が圭吾さんの前へ集まった。いつもの顔ぶれを確認し、圭吾さんは口を開く。

「みんなおはよう。今日は——清水は午前中に打ち合わせが入っているな？ 渡辺はセミナー参加で終日不在、高橋は……外回りか」

ホワイトボードに書きこまれたそれぞれの予定を確認。その後、圭吾さんは全員に待っているようお願いしてフロアを出ていき、研修に来た二人を連れて戻ってきた。

「前から伝えていた通り、年明けには札幌支社立ち上げだ。現地採用した社員が育つまで、ウチの本社をはじめとする既存の各支社から、一ヶ月ごとに誰かしら長期出張してサポートする。まずは私が来月から行く予定だが、留守の間の私の仕事は清水が代行するのでそのつもりで。それからここにいる二名は北海道で現地採用した新卒だが、半年間の研修を終えてきている。それぞれ力はあるが、皆でサポートしてやってくれ。では自己紹介を順に」

圭吾さんに促され、前に一歩進み出たのは若い男性。

「初めまして。新井田海斗と申します。函館出身の二十三歳です。ずっとサッカーをやっていたので体力には自信があります。それと、アニメとゲームが好きです。今はアーケードゲームにハマっていて、休日に友達と遊びに行っています。えーと、すいません、オタクです！」

爽やかに笑顔を見せる新井田君に、どっと笑いが起きる。小学生の頃から大学のサークルまでサッカー一筋だったらしく、高身長、引きしまった体軀、よく日に焼けた肌に白い歯……むむっ、これはいいですね……

「君、俺になんか用？」

僕はいつも生徒会室からグラウンドを眺めていた。キラキラと降り注ぐ太陽の下で、サッカー部が練習している。僕は中学生の頃までサッカーをやっていたけど、膝を壊し、激しい運動ができなくなってしまった。そのことに納得はしているけれど、時折、ついサッカー部の様子を眺めてしまうのだ。そして、その中でも彼から目が離せない。恋、と気づくまでそう時間はかからなかった。

そんなある日、こっそり見ているのが彼に気づかれてしまう。

彼は、僕をまっすぐ見つめながら尋ねてくる。僕はその刺すような視線にゾクゾクし――

なにやら鋭い視線を感じてハッと顔を上げると……いやあああつ！ 圭吾さんが睨んでるう!!

人目が無かったら絶対にグーパンチ飛んでましたね！ いやいや、あつぶねーっ！

それにしても、なんだこの新井田という男は。オタク、ですと？ ノンノン！ こんなオープンなおタクなんて認めませんよ！

だいたいアーケードゲームを友達と、ですって!?! それなんてゲームなのさ。友達と、つてのがもうリア充くさい。

同じオタクとして彼の爽やかさが癪に障り、よっぽど戦いを挑もうかと思いましたが、そもそも私が腐女子であるのはトップシークレットなので、口を噤みます。

私がそんなことを考えているうちに、もう一人の女性の自己紹介が始まりました。

「笹森香織です。二十二歳……あつ、早生まれなので新井田君と同じ学年です。内地に長い間滞在するのは初めてなので、仕事はもちろん生活面のことも色々教えてください。よろしくお願いします」

新井田君の隣で、ほっぺたを真っ赤に染めてペコッとお辞儀をした彼女は、一言でいえば、青春漫画のアイドル。そのものでした！

運動部なんかでマネージャーをしていて、練習終わりにはレモンのハチミツ漬を差

し入れちゃったり、膝を擦りむいた男子に「痛い？」なんて消毒しながら上目遣いしちゃうたり……

うわああこいつかわえええええっ！ と叫びたくなるような、いわゆるオンナノコ。独身男性達が、おおっと色めき立つ。これは愉快な争奪戦が始まるかもしれません。いいネタになることを祈る。私は、傍観者ぼうかんしゃとして楽しませていただくこうと思います。

新井田君は二ヶ月、笹森さんは一ヶ月、エルダー制度でその期間を過ごす。

エルダー制度では、先輩社員がいつも傍に付き、マンツーマンで指導したり面倒を見たりするのだ。実務も職場環境についても相談しやすいので、新入社員が馴染みやすいのが利点です。

新井田君にはマメ橋センパイ、笹森さんには渡辺センパイが付くことになっている。ですが、マメ橋センパイはただ今外回り中で、渡辺センパイも一泊二日でセミナーへ参加している。のっけからタイミングが悪いですね……

今日のところは同じ年齢ということ、私が社内のことなどを教えることになっている。すでに支社で研修済だから、仕事そのものに関しては問題ないだろうけれど、あたりとでは勝手が違うところもあるだろうし、私にお任せくださいーい！
圭吾さんから二人を引き渡されて、私も自己紹介をした。

「滝浪ユリ子二十三歳、お二人と同年なの。私も四月に入社したばかりなので、あまり頼りにならないかもしれないけど、よろしくね」

挨拶しつつ、二人を見上げる。新井田は私と比べて頭一つ以上大きく、笹森さんも女子にしては背が高い方なので、一五二センチの私にはやや首が痛くなる一日になりそうです。

「えーと、滝浪さん、お世話になります」

「はい。じゃあ、さっそく、社内の案内から始めますね」

後ろに二人を従えて、それぞれの部署やトイレの場所、資料室や会議室などを回る。

新井田君は初対面の私にもどんどん話しかけてくる。さっすが営業部、期待の新人なだけありますね！

あれこれと話しているうちに、ん？ と気づいた。笹森さんはそうでもないけれど、新井田君は方言がちよいちよい出る。聞けば、「ああ、俺は函館の田舎に実家があって、ばーちゃん子だったから」と爽やかな笑顔で答えた。

笹森さんは？ と尋ねると、訛なまらないように練習したけれど、ふとした時に出ちゃうんです、と頬をピンクに染めながら言った。うおお、可愛いなあ！

案内中、新井田君は気になることをあれこれ私に質問し、笹森さんは手帳にサラサラとメモっている。それから電話を受けた時の対応、書類や事務用品のしまってある棚な

どを説明して回っていると、いつの間にか昼休みになってしまった。

大体は外へ食事に行ったり、お弁当を買ってきたりするけれど、今日は私、お弁当を作ってきたんだよね。二人にはどうしてもらおうかと考えていると、マメ橋センパイが戻ってきた。

「ただいまー」

「あ、お疲れ様です！ そうだ、新井田君、笹森さん、こちらがマメは——じゃなかった、高橋センパイです。新井田君にこれから付けてくれるセンパイですよ」

「お久しぶりです先輩！ その節はありがとうございました」

マメ橋センパイに向かって爽やかな笑顔を向ける新井田君。

「えーと、マメ橋センパイの後輩でしたよね？」

「そうそう。就職活動中に大学のOB会があって、そこで初めて高橋先輩と会ったんだ」

「教授からさ、おれとタイプが似てるし、営業向きだからって新井田を紹介されてね。

だからうちの会社にナンパしたのさ」

大学の先輩後輩、男二人で笑いあう姿……おお……新たなネタ発見ですよ。

そう言われてみれば、確かに新井田君は人好きのする笑顔や、コミュニケーション能力の高さがマメ橋センパイと似てるかも。

ひとしきり雑談していると、マメ橋センパイが「あっ」と、腕時計を見た。

「やべ、もう昼過ぎてるのな。三人ともこれからお昼？」

「そうなんですよ。私、お弁当持ってきちゃったので、新井田君と笹森さんのお昼、どうしようかと思ひまして……」

「じゃあ、おれもまだだし、二人を連れて昼行ってくるわ」

昼食はたいいていと圭吾さんがお弁当を一緒に食べる、というのを知っているマメ橋センパイは、気を遣ってくれたのだ。

いってらっしゃーい！ と送りだして、私は自分の席に戻り、お弁当を取り出す。大事に抱えて振り返ると、圭吾さんはちょうど電話中だった。カタカタとキーボードを叩きながらモニターを見て、通話している……うう、我が旦那様ながら超かっこいいですね！ 背後の窓から太陽の光がキラキラと差していて、まるで後光のようです。

受話器を持つ手……真剣なお顔……ブルブル震えちゃうほど素敵です！ それからキリッと引きしまった表情で仕事の話をしている声！ その声で甘い言葉を吐かれてもらんなさいよ！ 腰砕け、とはまさにこのこと、という体験ができますぜ！！

以前ならばこの萌えを漫画にすべてつきこんだものですが、禁止令がでているもので……それでもまあ妄想するのは禁止されていないので、電話が終わるまで存分に楽しませていただきますぜ、旦那！

ゴスッ。

「ぎゃっ！」

「場所を考えろ、場所を」

「ちよ、早っ！ いつの間に電話終わったんですかっ！ っていうか、そこファイルの角！ 角！」

目の前に星が飛びましたよ！ うおおお、痛い痛い！！

危うくお弁当箱を落とすところでした！！

圭吾さんは私の鼻をキュツとつまみ、小さくため息を吐いた。

「ユリ。今フロアに誰もいないからよかったが、その妄想中にだらしなくなる顔はどうにかならんのか」

「へ!? ほーひはっへ（どうにかって）？」

「封印しろ」

へっ? だらしない表情をした覚えはないんですけどねー?

「無自覚め。いいか、そういう素の顔は俺だけのものだ。少しは慎め」

「は……は、いい……?」

無自覚? 素の顔? 私は訳がわからずキョトンとする。すると、圭吾さんは顔を緩め、私の頭を大きな手でポンポンと撫でた。

「まあいい、それがユリだからな。腹減ったし、行くぞ」

「あっ……は、はいっ！」

私が抱えていた二人分のお弁当箱を圭吾さんはひょいと持ち、いつも一緒にお弁当を食べる時に使う小さな会議室へ足を向ける。

私は火照るほつぺたをペチペチと叩きながら、「待つてくださいーっ！」と圭吾さんの背中を追いかけていった。

午後になると、マメ橋センパイは新井田君を連れて再び外回りへ出た。

一方、渡辺センパイは終日不在なので、笹森さんは私と一緒に事務処理を始めることに。すでに他の支社で研修済なので、実際のところ、業務に関して教えることはあまりない。というか、私と同じレベルだと思う。

私は十六時からの源じい……じゃなかった、ゲンゾウ工房との打ち合わせに同席するので、それまでですが。

「——笹森さんは、もう大体のことはオッケーだよな?」

隣の席に座った笹森さんのほうを向いて問いかける。すらりと伸びた脚っただけでもポイント高いつーのに、お行儀よく膝小僧をきちんと合わせて座っている姿はますます可愛らしい。

チラッと見ながらムラムラしている私に、笹森さんは桜色の唇を開けて答えた。

「はい、おそらく滝浪さんよりできると思います」
——んっ？

「でもこちらの会社では初めてなので、渡辺先輩がいらっしやるまではよろしくお願ひします」

——んんっ？

なにか言葉に棘を感じましたが、気のせいでしょうか……

あ、あはは……と曖昧に笑っていると、電話が鳴った。おっと、二コール内で取りますよ！——って！ 私が手を伸ばそうとしたその矢先、笹森さんの手が受話器を取り上げた。

「はい、お電話ありがとうございます。——」

ハキハキと、聞き取りやすい声で話す笹森さんは、すでに歴戦の勇者並でした……

電話は取引先からの問い合わせだったようだけれど、笹森さんは一言も私に尋ねず、営業の担当者にサツサと電話を繋いだ。受話器を下ろした彼女を、ぼかんと眺めていたら、ふっと鼻で笑われた。

「一応、ここでの先輩ですよね？ しっかりしてください」

「え……っていうか、取引先とか担当とか、まだ教えてなかったような……」

「午前中見せていただいた資料で、大体掴んでますから。基本中の基本です」

う、ううっ、笹森さんてハッキリ言う人だな……怖いっ。

……ムムム……なんだか一筋縄ではいかなそうな予感……

同い年ということもあって、もっとフレンドリーに付き合えるかなと思いましたが、ひよっとしてアレですか？ 私のオタク臭が漏れていて、警戒させてしまっているのでしょうか？

書類作成時にも私に見せることなく提出（内容は合ってる）、来客時の対応（言うことなし）、データ入力（私の半分の時間で終了）……

な、なんだよおっ！

「滝浪さん、ゲンゾウ工房の過去のデータ出してもらえる？」

圭吾さんが私の机の傍らにやってきて、そう言った。

「あっ……はいっ！」

打ち合わせの準備をしなきゃいけなかった！

慌ててパソコンを操作していたら、横から「この資料で合ってますか？」と冊子が差し出された。

「……これは笹森さんが？」

「過去のデータと、それに関係する資料をいくつかまとめてあります……や、やだ！ すみません！ 出過ぎたマネをしてしまいました……」

私をちらつと見ながら、頬をピンクに染める笹森さん。

——え、ちよ、その態度……ナニ!?

「いや、助かる。——なかなかよくできているじゃないか。今日さっそく使わせてもらおう」

「ありがとうございます。ウフフツ、憧れの袴田課長に褒めていただいて、とても嬉しいです」

「憧れ……? それは光栄だな」

「以前より噂に聞いておりまして……課長のお役に少しでも立てるよう色々勉強してきましたから。北海道でも一ヶ月ご一緒させていただくので、よろしくお願いします」

「ああ。期待してるよ」

おおお……ピンク色のオーラが見えますよ！ なんだ、この華やかさは！

こ、これが女子力というものか……っ！

圭吾さんが資料を持って応接ブースに向かったのを見届けると、笹森さんは黙ってパソコン操作に戻った。

「笹森さん、けい……ゴホン、袴田カチョーの噂ってどんな内容なの？」

すると笹森さんは、モニターから視線を外すことなく、面倒くさそうに口を開いた。

「あんなにできる人、なかなかいいわよ。研修先でも評判は散々聞いたわ。誰も思い

つかないような素晴らしい改革をするって」

そうですね、ええ、そうですねとも！ 圭吾さんはすごいお方なのです。

「人にも厳しいけれど、自分に対してはさらに厳しい。それに部下を育てるのも上手だって、課長と一緒に仕事をした人が口を揃えて言うわ」

ああ、それはもうよくわかります。ちよっとしたアドバイスで、ああこういうことか——って開眼かひがんできるのです。圭吾さんの部下として置いていただいたおかげで、我ながらとても成長したと思いますよ。まあ……笹森さんを見ると、その自信が消え失せますすけど。

「おまけにあのビジュアルでしょ？ 全国に彼女がいるとか、入れ喰いとかが、ずいぶんなこと言われていたけど、実際は全く遊んでいる様子がなかったのよね。それとなく聞くと『心に決めた人がいる』なんて王子様みたいなセリフを、なんのためらいもなく言うてのけたりするらしいの！」

現地妻！ 入れ喰い！ わあああっつ！

いや、確かに私も入社当時は、そのようなことを思わないでもなかった。だってほんとに高スペックでステキな人なのに、彼女もない独身男性なんて（バツイチですけども）、とつても希少きしょうですからね。

——きつと遊んでるでしょーね、などと思わせといて、実はその相手は男の部下。決

して知られてはいけないし、伝えてはならない秘めたる想いを胸に、日々業務をこなす……そう、それは男×男のメイクドラマ——っていう方向に妄想が働いてしまい、全三作ともなった『課長、深夜に愛を』ができあがったのです。

っていうか、笹森さん、口調がずいぶん砕けて……ま、まあいいですけど。

視線すらこちらに向けずに話していた笹森さんは、急にダン、と机を拳で叩いた。

「それが、よ？ 急に結婚したっていうじゃないの！ 私が入社した時は独身だって聞いていたのに、なんで……！」

「え……ええ？」

「バツイチってのは知っているけど、それ以降はフリーだったはずよ？ 色々探りを入れていたけど、そんな気配全くなかったのに！」

怒りがキーボードへ向かったのか、ダダダダダダダダッと恐ろしい速さでデータが入力されていく。

その様子を傍から見ている私は慄きました。ま、まさか……!?

笹森さんはギシツと背もたれに体を預け、ゆっくりと私を見た。

「……ねえ、滝浪さん、袴田課長のお相手って知ってる？」

「ひっ……！」

ちよ、ちよ、ちよっと！ えええ？ ひよっとして…… 袴田課長と結婚した私

のこと、知らない……んですか？ そしてそして、えーっと、つまり、笹森さんてば、圭吾さんのことが……？

私の混乱をよそに、笹森さんはじーっと私の目を見て言った。

「袴田課長と結婚した相手よ。あなた、課長の補佐をしてるんでしょ？ ほら、同い年のよしみで教えて。ねっ？」

「し、し……知って、どうするんですかっ！」

動揺する私に、笹森さんはにっこりと答える。

「奪うのよ」

「えっ」

「私ね、障害があった方が燃えるの。だいたい、私が今回の出張研修に立候補して、北海道からわざわざここにやってきたのは、袴田課長がいるからだもの。袴田課長の……ううん、まあいいわ。それはこっちのこと。で、どうなの？ あんなにもできる人の妻だから手強そうだけど……」

いえ、むしろチョロいかと思います……じゃなくて！

「おおおおおおくさまについてですがっ……！」

「どう？ ユリちゃん納品書できた？」

私が意を決して、自ら名乗り出ようとしたところで清水係長——この秋から係長に就

いた——が、私達のところへやってきた。

心臓が恐ろしい速さでリズムを刻んでいたところに、急に話しかけられた私は「うぎゃっ！」と椅子ごとひっくり返ってしまった。

「きゃあっ！ 滝浪さん！」

「ユリちゃん!？」

ガターン、と盛大に転がったため、フロア中の視線が私にク・ギ・ヅ・ケ☆——つてそうじゃない！

「ううう……痛い……はっ！ し、失礼しましたっ！」

ヨチヨチと這い上がり、こちらを見ているフロアの人々へ向かってペコペコと頭を下げた。トホホ、お恥ずかしい。

圭吾さんは電話中だったけど、こつちを見ながら口を動かし『阿呆』と……

そ、そうですね。仕事中は私に対して、圭吾さんはあくまでも一社員として接するのです。

「滝浪さん、大丈夫ですか？ 痛むところ、ありませんか？」

先ほどまでと打って変わって、笹森さんはいかにも〴〵同僚を心配する優しい女〴〵へと変身していた。おおお、す、すごい女優っぷり！ 倒れた椅子を起こしたり、乱れた私の服をポンポンと叩いてくれたり……しかし私は知ってしまったのだ……これは、演技

である！

「優しいね、笹森さん。それにすっかり滝浪さんと打ち解けたようで安心したよ。渡辺さんが戻るまで、よろしく頼むね」

「あっ、あの——」

「はい！ 色々勉強させてください、滝浪さん。——誰にでもできる簡単なお仕事、ですけどね」

花が綻ほほんだように笑顔を見せていたけれど、清水係長が納品書を持って去ると、ほっこりした空気が一変する。

「誰にでもできる、つて訳じゃ……」

思わずそう言いかけたけれど、笹森さんに鋭い視線を向けられて怖気づく。

い、い、言い出せない……怖いよ！ おかーさん！

どうやら仕事ぶりから、私は格下に認定されたらしい。

それにしても、笹森さんにいつどうやって圭吾さんの妻の存在を知らせましょう……これは困ったことになりましたね……。披露宴には、本社の社員ほぼ全員を招待しましたから、皆さん私が妻だと知っていますが、本社以外には知らない人もいますよね、そりゃ。本当の苗字みょうじについても、妻となった人についても。

いやあ……これは早く言った方がいいですね？ 今ですらこんなに恐ろしいのです

から、後から知れたら——地獄の一丁目へご案内、ですよ！

「笹森さんっ！ あのね——」

「あら、そろそろお客様が来る時間よ。早く支度してね」

「実は——あっ、あああ……」

「トロクさいわね。本当に袴田課長の補佐してるの？ 今すぐ代わってあげてもいいのよ」

「うえ……！ ご、ごめんなさいっ」

……ん？ なんで私、謝ってるんだろう？ おかしいな、立場が逆転しているような気がします。せ、せめてここは対等にいきませんかー！

私が口をパクパクさせている間に、笹森さんはプリントアウトした資料をテキパキとファイルにまとめ、椅子から立ち上がった。私もバタバタと書類を抱えて後を付いていく。う、うん、いいよね。打ち合わせが終わったら、折を見て話そう。

——とまあ、打ち合わせは、大体想像はできていましたが、まさに、笹森無双^{むまう}でしたね……

源じいとの打ち合わせにも同席した笹森さんは、ちゃっかり圭吾さんの横に座り、控えめながらも所要所で資料を出し、彼女のナイスアシストのおかげで、とても順調に

話し合いが進んだ。

「ユリちゃんやあ、ちったあ先輩見習ってまめったくな。せーでもえらいようだったら……そうだな。ほんなら、ちーつとずつやらざあ」

「笹森さんは先輩じゃなくて、んーと、同期なようなもんです。……そんならさ、えらくなったら源じいんとこで、またお菓子よばれてもええ？」

「えーよえーよ。嫁っこん在所からめんずらしいのが届いたからな。近くん来たたら、ちよっくら寄ってけ」

私と源じいど話が盛り上がる。初めの頃は、ちゃんと畏^{かしこ}まった対応をしていたんだけど、素^すで話してくれ、と言われて以来、ついつい方言丸出しで話してしまうのです。うちの実家は田舎だし、おじーちゃん達と同居しているので、身に沁^{しみ}みついているんです。呆然^{ぼうぜん}と私と源じいど様子を見ていた笹森さんが、圭吾さんにコソコソと尋ねた。

「……課長……ええと、すみません、よくわからなくて……」

「『少しは先輩見習ってよく働きな。それでも大変だったら少しずつやればいい』、それと、『疲れたらお菓子』馳走^{ちしゆ}になってもいいか』『嫁の実家から珍しいのが届いたから、近くに来たらちよっと寄りな』、と言っているんですよ、笹森さん」

「すこおい！ 本社の辺りにもこんなに方言あるって知らなかったです。私も気づかず喋^{しゃべ}ってしまっって、びっくりされますけど」

「北海道の方言で？」

「はい。タクシーに乗った時、『ああこわい』って眩くらいたら、『俺、怖いけ？』って運転手さんから聞かれちゃいました」

「それはどういう意味なんだ？」

「疲れた、です。ですから、私としては『あー疲れた』と言ったつもりなんですよ」

口元に手を当てて、クスクス笑う笹森さん。そして、圭吾さんの肩にさりげなく手を置いて……ってどういうことさ！　そこ！　ちゃっかり距離縮めてるんじゃない！！

「ほおか、笹森さんといったか。北海道の衆か？」

「ええそうです。こちらで研修を受けるために北海道から来ました。一ヶ月間という短い期間ですが……」

「笹森さんはすでに他の支社でも経験を積んでおり、大変優秀だと聞いております。滝浪も彼女から学ぶことが多いでしょう」

そういつて圭吾さんは私達に微笑んだ——ちよつと、笑顔サービスしすぎなんじゃないですか？　圭吾さん！　ていうか、ちよつと今、圭吾さんに寄って座り直したよね、笹森さん！！

——と、表面上は大変なごやかに打ち合わせは終わりました。

はう……

自宅に戻るなり、バツタリとソファに倒れこんだ。

気疲れです。精神的疲労です……私のライフはゼロよ！

今日はシフォン素材のブラウスに、ピンクのニットカーディガンを羽織り、小花プリントのフレアスカートはを穿はいています。皺しわになりにくい素材なので、ゴロゴロしても大丈夫です。圭吾さんは今日も遅くなると言っていました。だから安心して、寝ころんだまま、いよつ！　とお尻を上げてストッキングを脱ぎ、ゴソゴソと背中に手を伸ばしてブラジャーのホックをはずす。ふう……ちよつと楽になりましたね。

だらしがないのは百も承知ですが、今はちよつと動きたくありません。

ほんつとに疲れた……

笹森さんが演技派女優だったとは。見た目は守ってあげたいタイプの可愛い子なのに、私への言葉はとんでもなく辛辣しんらつです。そんな恐ろしい相手に、実は……袴田課長の妻は私です！　なんて言えますか？　言えませぬね。

言うなら早く、と意を決して告白するタイミングを見計らってはいたのですが、なかなかチャンスがなく、今日のところは断念しました。

いやいや、でも明日は渡辺センパイが出社します。もともと笹森さんは渡辺センパイ